

雑 報

生 田 原 町 共 栄 金 山

この調査は、昭和35年11月に行なつた。

この鉱山は、生田原市街の南東方約4kmの、標高約500mの山腹にある。この間、1kmを残し3kmの間にはトラック道路が通じている。現在約10名の従業員で採鉱中である。地質は、新第三紀中新世のリソイダイト質流紋岩と、同質の角礫凝灰岩が広く分布している。

鉱床は、まえにのべた岩石を母岩とする不規則な網状の細脈で、表土近くには、原地残留鉱床（土砂鉱）が生成されている。土砂鉱は、低品位で、稼行の対象にならない。

鉱脈は、大きくみて、E—W性のものとN—S性のものがあり、いずれも含金銀石英脈である。N—S性のものは、流紋岩の節理を充填したもので、0.1cm～2cmの細脈となつている。E—W性の脈は、N—S性の節理面に生じた裂隙を充填したもので、一般に粘土

をとめない、10cm～65cmの脈幅を示し、鉱脈の形態をとつている。

過去においては高品位なN—S性の鉱脈のみを採掘し、E—W性の鉱脈は低品位なものとして、手がつけられていなかった。しかし、現在の坑道から観察すると、E—W性のものがかならずしも低品位ということはできず、むしろ、高品位の部分のあることが判つた。

鉱石は、石英を主とし、硫化鉱物をほとんどもなわれない。金・銀の比率は、 $Au:Ag=1:0.6\sim 1$ で含銀比率がひじょうに低い特性をもっている。含金状態は一般にひじょうに高く、自然金が認められ、平均して $Au30\sim 100\text{ g/t}$ である。

将来は、坑内外の精密な調査と、かつて位品位なものとして、かえりみられていなかったE—W性の鉱脈について十分な再検討を要する。

（調査：藤原哲夫）

常 盤 村 止 若 ニ ッ ケ ル お よ び ア ン チ モ ニ ー 鉱 床

この調査は、昭和35年5月に行なつた。

鉱床は、2カ所にある。アンチモニー鉱床は、宗谷本線南咲来乗降場の南西約2kmの地点、ニッケル鉱床は、同乗降場の南西約4kmの地点である。鉱床附近の地質は、主に、蛇紋岩と白亜紀層とから構成されている。蛇紋岩は、鉱床附近で、いちじるしく珪化作用と炭酸塩化作用をうけている。

アンチモニー鉱床は、いちじるしく珪化、炭酸塩化した、黒色～褐色の堅硬な岩石を母岩としている。原岩の構造がまったく失われているので、原岩は明らかでない。鉱床は、 $N5^{\circ}\sim 75^{\circ}E$ 方向の剪断帯中に胚胎する、幅数mのレンズ状の鉱床である。延長は確認されていないが、露頭状況から判断すると、延長のない小規模なもの判断される。構成鉱物は、針状ないし不規則形の輝安鉱を主とし、ほかに、黄鉄鉱、緑色のニッケル鉱物（珪ニッケル鉱？）もみられる。品位は、 $Sb\ 6.70\%$ に達することもあるが、一般に低品位で、 $Sb\ 0.51\sim 1.34\%$ である。そのほか、 $Ni\ 0.14\sim 0.27\%$ 、 $As\ 0.33\sim 0.45\%$ がふくまれ、 Hg も痕せきていどふくま

れている。

ニッケル鉱床は、粘土化した蛇紋岩と白亜紀の黒色頁岩、灰色砂岩互層の接触部に胚胎し、珪化と炭酸塩化作用が強く行なわれている。鉱床は、白亜紀層中に、ほぼN—S方向に直立したレンズ状鉱脈をなすものと、蛇紋岩体の一部が一種の残留粘土鉱床をなすものがある。前者は、最大幅80cm、延長約30cmが確認され、後者は幅約6mていどが露出するだけで規模については明らかでない。

品位は、レンズ状鉱脈で $Ni\ 0.29\%$ 、残留鉱床の粘土化の始まつた部分で $Ni\ 0.28\%$ 、そのやや進んだ脈状になつた部分で $Ni\ 0.36\%\sim 0.37\%$ 、完全に褐色の粘土化した部分は $Ni\ 0.43\%\sim 0.61\%$ 、となつており、平均して低品位である。

この地域のアンチモニー鉱床、ニッケル鉱床は、ともに蛇紋岩の進入と密接な関係をもつものであるが、鉱床は一般に小規模でかつ低品位である。現在では稼行の対象にならない。

（調査：藤原哲夫）

福島町基盤坂の重晶石鉱床

この調査は、昭和35年10月に行なつた。国鉄江差線基盤坂駅で下車し、知内川を約7kmさかのぼると鉱床に達する。その間約4.5kmは自動車道路が通じているが、残余の約2.5kmの間には、歩道が通じているだけである。この歩道の自動車道路への改修は、地形上容易でない。

鉱床の露頭は、知内川の両岸にみられ、走向はN10°E、傾斜は70°Wである。断層帯の裂隙を充填する鉱脈型鉱床で、膨縮に富むが、走向延長280mの間は追跡できる。

鉱石は、淡白色を呈し結晶質で石英にとむもの、

ほとんど重晶石だけからなる2種類がある。石英は、主として重晶石の沈澱後に脈状に貫ぬくか、重晶石の結晶の間を充填している。重晶石は、1.2~1.5mmの大きさで点状形あるいは長柱状断面をしめすものである。

鍾幅は、変化にとんでいるが、平均して、40cmは期待できる。予想鉱量は、約10,240トンが見込まれ、鉱石もほとんど無選鉱で売鉱品位に達するので、搬出道路さえ通ずれば稼行できる。今後は傾斜延長の確認と同時に、南北両端の走向延長の探査に、主力を注くことが必要である。(調査：杉本良也)

三石町三石川の石灰石鉱床

この調査は、昭和35年7月に行なつた。鉱床賦存地には、本桐市街から梟舞川にそつて、歌笛、ピリガイ山道、上三石をへて、自動車林道が通じているが、この間は約23kmである。

鉱床の露頭は、三石川とピラシユケ川の合流点附近に3カ所、合流点の下流約3kmの地点に1カ所みとめられる。上流のものから、それぞれ第1、第2、第3鉱床(以上日高国試掘権登録第100号)および第4鉱床(日高国試掘権登録第2360号)と呼ばれている。

第1鉱体；ピラシユケ川川口から約40m上流左岸にある。自動車道路の切割で、延長約50m、幅10m、高さ20mの露頭がみられる。露頭の両延長は確認されていない。石灰石は、一般に灰白色を呈しているが、局部的に淡紅色の部分があるが、ぼかし状にはいつている。全般的に顕晶質であるが、部分的に結晶の粒度がことなつている。また珪質で、かなり硬い部分が局部的にみとめられる。

鉱量は、確認できた形態から計算すると、約26,000トンである。計算基礎：延長50m×高さ20m×幅10m×比重2.6

第2鉱体；ピラシユケ川川口から、約300m下流の本流左岸、河床からの比高約140mの山腹斜面にみとめられる。鉱体は、ほぼ南北の走向をしめし、延長約60m、幅20m、高さ15mの紡錘形をとつているようである。石灰石は、淡紫色、淡灰紫色を呈し、局部的に

濃淡がみとめられる。全般的に微顕晶質で、方解石・石英などの白色細脈が、不規則に発達している。鉱量は、約46,000トンである。計算基礎：延長60m×高さ15m×幅20m×比重2.6

第3鉱体；ピラシユケ川川口から約500m下流の左岸山腹にみられる。N10°~15°W方向に長軸をもつた、延長約40m、幅20m、高さ15mの紡錘形状の鉱体と考えられる。石灰石は、一般に灰白色を呈しているが、部分的に暗灰色をしめすものもある。全般的に石灰石や石英の細脈が発達している。確認できた範囲内の鉱量は、約31,000トンである。計算基礎：延長40m×高さ15m×幅20m×比重2.6

第4鉱体；ピラシユケ川川口から直距離約2km下流の本流右岸にみられる。河床から5m前後の高さで、約50mにわたつて露頭がつづいているが、川流にそう大きな断層で切られ、左岸にはのびていないと考えられる。石灰石は、一般に小豆色を呈し、局部的に濃淡がある。一部には、淡灰色の部分もみとめられる。鉱量は約710,000トンである。計算基礎：延長110m×高さ50m×幅50m×比重2.6

以上のべたように、第1~第3鉱体は、小さなものが散在しているので、採掘条件が個々の鉱体で異なり、きわめて不利である。また、やや鉱量の多い第4鉱体は、搬出がきわめて困難である。したがつて、早急に開発を行なうことはできないであろう。

(調査：小山内 照)

浦河町春別川の石灰石鉱床

この調査は、昭和35年7月に行なつた。鉱床は幌別市街から約16km北東の、春別川河岸にみとめられる。

現地までは、自動車林道が通じ、交通は便利である。

鉱床は、春別川をはさんで東西両岸にみられる。両

岸とも、きり立つた山陵を形成し、 $N40^{\circ}\sim 50^{\circ}W$ 方向にのびている。春別川の右岸林道切割には、約20m幅の露頭であるが、約100m上の山頂部では、少なくとも40mに達している。走向延長は、約200mはみつもられる。左岸では、河床に約90mにわたって石灰石の露頭がみられる。右岸と同様に高さ100m附近に石灰石の岩峰がみられ、走向延長は、200mはみつもられる。石灰石の色調は、灰白色を主体としているが、左岸のものが、やや濃く、暗灰色の部分が多い。一般に

微細な結晶で構成された、微晶質である。

・ 鉱量は、約2,860,000トンと概算され、企業化できる量である。

計算基礎

右岸；延長200m×高さ100m×幅20m×比重2.6×安全率50%

左岸；延長200m×高さ100m×幅90m×比重2.6×安全率50%

(調査：小山内 熙)

栗沢町宇美流渡の石材

この調査は、昭和35年11月に行なつた。

石材現場は、万字線美流渡西方約1.5kmの点で、現在までトラック道路が通じている。この地域は、中生代の三笠層が広く分布している。今回の調査の対象は、この三笠層を貫ぬく玄武岩質安山岩である。

この安山岩は、緻密堅硬で、路床敷石、コンクリート骨材に最適である。

採石現場で観察すると、 $N40^{\circ}W\sim 60^{\circ}W\sim 70^{\circ}E$ の節理と、これに斜交する片状のほぼ水平な節理が発達している。しかし、岩質はほとんど均質で、材質の点で

は心配はない。埋蔵量は概算で約100万 m^3 が見込まれる。

今後は、現在の採石現場をさらに西に移動することによって、節理に沿って崩落する危険がさけられ、採石現場をいまの位置から一段下げることによって採石面を広く取ることが可能で、採石量を増すことができる。

採石から砕石までの一連作業ができ、道路も施設されているので、きわめて好条件である。

(調査：国府谷盛明・松井公平)

千歳市シシャモナイ沢の温泉

この調査は、昭和35年11月に行なつた。

調査地は、支笏湖の東岸、シシャモナイ沢、ガロウの沢を中心とした樽前山の東側に発達する扇状地状の砕屑物による扇状地堆積物からなっている。

いちおう滞水層と考えられた溶結凝灰岩からの湧水がみられない。また下部に期待をかけたが、この地域は不風死岳の南側を含む広い集水面積をもっているので、高温の温泉を期待することはできない。

地温測定は、シシャモナイ沢の北、樽前山の北東部か

らつづくガロウの沢を中心に100m間隔で約1.5kmの鉄製パイプを打ちこみ、地表下1mの温度を測つた。その結果 $7^{\circ}\sim 10^{\circ}C$ の範囲であつた。

なお、不風死岳西部の大崎附近の湖畔には窒素その他の不燃性ガスの湧出があつたが、温泉徴候と直接むすびつけることはできない。

以上のことからこの地域の温泉の湧出は期待できない。

(調査：国府谷盛明・松下勝秀)